日０９－１５

「悪夢探偵２」 ✡✡

２００９（平成２１）年1月２０日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本・製作・撮影・編集：塚本晋也
原作：塚本晋也『悪夢探偵２　怖がる女』（角川文庫刊）
影沼京一（悪夢探偵）／松田龍平
間城雪絵（女子大生）／三浦由衣
菊川夕子（雪絵の同級生）／韓英恵
影沼滝夫（京一の父）／光石研
影沼逸子（京一の母）／市川実和子
アキ子（雪絵の親友）／松嶋初音
睦美（雪絵の親友）／安藤輪子
間城貴理子（雪絵の母）／内田春菊
菊川哲治（菊川の父）／北見敏之
２００８年・日本映画・１０２分
配給／ムービーアイ

<やっぱり時間のムダだった？>

私は『六月の蛇』（０２年）にみる塚本ワールドは大好き（『シネマルーム３』３５９頁参照）だが、『悪夢探偵』（０６年）はｈｉｔｏｍｉが出演していたから観に行っただけ（『シネマルーム１３』３９２頁参照）。

この映画のテーマは、ズバリ「怖さ」。パンフレットの巻頭には、「子供のころ、夜が怖くてしかたがありませんでした」から始まる塚本晋也監督からのコメントがある。それによると、この映画は主人公京一（松田龍平）の母親の死の謎を追いながら、怖いという感情の秘密を探ること。なるほど、そう言われれば、そんなものかと納得できるが、悪夢探偵がそんな人間の深層心理の中に入っていく姿をどうやって映像化するの？もちろん、それが塚本晋也監督の腕の見せどころ。

そんな鬼才塚本晋也監督による『悪夢探偵２』のパンフレットや宣伝チラシには、小川洋子、市川拓司、よしもとばなな、梁石日、貴志裕介、松尾スズキ、米良美一らの絶賛コメントが満載。しかし、こんなたくさんの著名人による応援にもかかわらず、客席はガラガラ。そして、私の採点は久しぶりの星２つ。つまり、私にとってこの映画鑑賞は、ハッキリ言って時間のムダだった・・・？

<怖さの源泉は？>

この映画を観て私なりに理解したのは、京一の母親逸子（市川実和子）が怖がるのは、なぜか一般の人には見えないものが見えたり、他人の心の中が読めてしまうため。この世の中にはそんな特殊能力を持った人間が稀に存在するらしく、それが京一の母親逸子。そして、京一はその血筋を受け継いだらしい。

他方、京一の父親である滝夫（光石研）に、妻逸子が一体何を恐れているのか理解できなかったのは当然。スクリーン上で表現される、影沼家の食卓で突然逸子が見せる恐怖の表情とその後の彼女の行動は常軌を逸するもので、滝夫が戸惑うのは仕方なし。その結果、逸子は死んでしまうのだが、その傷を心に抱いたまま成長したため、京一は他人の夢の中に入り込む特殊能力をもった悪夢探偵と呼ばれていた。そんな、京一が今、毎晩同じ夢を見ているのは一体ナゼ？

<２人の１０代の女優に注目！>

『悪夢探偵』の目玉はｈｉｔｏｍｉの起用だったが、『悪夢探偵２』の目玉は、間城雪絵役に１９９２年生まれの三浦由衣を、菊川夕子役に１９９０年生まれの韓英恵を起用したこと。

『誰も知らない』（０４年）で絶賛され（『シネマルーム６』１６１頁参照）、『ｍｅｍｏ』（０８年）で初主演を果たした（『シネマルーム２０』１９３頁参照）韓英恵は何とも個性的な女優だから、監督としては大いに使い甲斐があるはず。そんな彼女は、イジメを受けて不登校となり、雪絵の悪夢に登場するようになる菊川役を見事に（不気味に？）演じている。

他方、親友の睦美（安藤輪子）、アキ子（松嶋初音）と共に、ちょっとしたいたずら気分で菊川を体育館の倉庫に閉じこめた雪絵は今、悪夢の中に登場する菊川の姿におびえて眠れなくなっていた。そこで悪夢探偵の評判を聞いた雪絵は京一の元を訪れたのに、京一はつれない返事ばかり。しかし、授業中睦美が謎の心臓麻痺で死亡し、さらにアキ子まで死亡したとなると、「ああ、イヤだ、イヤだ」とボヤきながら京一が重い腰をあげざるをえなくなったのは当然。しかして、京一はいかにして雪絵の夢の中に入り込み、菊川とのご対面を果たすの？

<菊川の目に見えていたものは？>

世の中には塚本晋也監督が言うように、夜が怖いという子供はたくさんいる。また大人になってもあれが怖い、これが怖いという人はたくさんおり、お化けモノや怪談モノは怖いから絶対ダメという人も多い。かくいう私も意外と怖がりで、残忍なシーンなどでは薄目にしてスクリーンを直視しないこともしばしば・・・。

雪絵、睦美、アキ子の３人組が菊川の怖がる姿を見て面白がったのは、あの年頃ではむしろ当たり前。また、なぜ菊川がそんなに極端な怖がりなのかまで思いが至らなかったのも当然。その結果、ちょっとしたいたずら心で雪絵らがとった行動が、菊川を不登校にまで追い込んでしまったわけだ。

ところで、なぜ菊川は京一の母親逸子と同じように怖がりなの？それは逸子と同じように、菊川には通常の人には見えない恐ろしい風景が見えているため。それが明らかになったのは、京一が菊川の部屋を訪れた時に見た菊川のスケッチブックによるもの。そこには一体どんな絵が描かれていたの？それは菊川の両親には全然見えないものだったが、逸子の特殊能力を受け継いだ京一の目には、そこに描かれている恐ろしい絵がハッキリと。なるほど、菊川の目にはこんな怖いものが見えていたわけだ。

さあ、そこまで真相究明ができれば、依頼者である雪絵の悪夢を取り除くため、悪夢探偵がとるべき行動は？

<アップの多用、不安定なカメラ、過大な音響効果、くり返されるセリフ>

塚本晋也監督作品の特徴は、独特の映像美とカメラワーク。『六月の蛇』では黒沢あすかの美しさを引き立てる映像美が目立っていたが、『悪夢探偵２』でもセピア色を基調とした独特の色彩感覚はお見事。また、『悪夢探偵』では揺れ動くカメラが見せる不安感と共に、音響効果が煽り立てる不安感が目立ったが、『悪夢探偵２』は前作以上に恐怖感を煽り立てる、過大ともいえる音響効果が際立っている。

とりわけそれは後半に入り、クライマックスを迎えるシーンで顕著。これは、落語の怪談モノでよく体験する、派手な鳴りモノが入り、続いて「お化けだゾー」とくる感じ・・・。こういう盛り上げ方が好きな人はいいのかもしれないが、あまりにもミエミエなそんな演出に、私は少しウンザリ。また、この作品で目立つ撮影手法はアップの多用。これは緊張感を盛り上げるのに大いに役立つうえ、アップに耐えうる松田龍平をはじめとするたくさんの名優を使っているから、結構効果的。

ちなみに、キム・ギドク監督作品はセリフゼロの『うつせみ』（０４年）は特別としても、セリフが極端に少ないのが特徴。塚本晋也監督がそれを真似たわけではないないだろうが、この作品の特徴上菊川にはほとんどセリフがないし、京一の母親逸子は「怖い」というセリフのくり返しだけ。また「キャー、お母さん」と叫ぶセリフも再三登場する。したがって、１０２分間もそんなセリフをくり返し聞かされていると、少しウンザリ・・・。もっとも、小さい時から心の病を抱え、今はやむなく悪夢探偵稼業をしている京一が、雪絵の依頼を受けてやむなく雪絵の夢の中に入っていくことによって、再び母親と出会うとともに雪絵を救うというストーリーを観客の心に響かせるための演出を、私が理解できないだけかもしれないが・・・。

２００９（平成２１）年1月２４日記